

## 第100回全国高校サッカー選手権大会千葉県大会総評

令和3年7月25日から8月2日までの日程で一次トーナメントが、10月16日から11月14日までの日程で決勝トーナメントが行われた。

真夏に行われた一次トーナメントでは、153校が21のブロックに分かれ、決勝トーナメントを目指し、白熱した試合を見せた。酷暑が予想されることから、今年度も試合時間が70分となり、キックオフ時間も昼間の時間を避ける形で開催された。負けたら終わりのトーナメントということもあり、多くのチームがリスクを最小限にするために、自陣ではボールをつなぐが、相手の背後にロングボールを供給していた。暑さとの闘いもあり、いかに我慢強くハードワークをして守備を続けられるか、勝負の命運を分ける試合が多くみられた。また、高校3年間の集大成の大会と位置付ける選手や学校も多く、個人能力、チーム戦術だけでなく気迫や執念といったものもみられた。

この21校にシード9校を合わせた30校で行われた決勝トーナメントでは、千葉県を代表する流通経済大学付属柏、市立船橋の2強を崩せるのが注目となった。攻撃では、試合の立ち上がりはロングボールで相手DFラインを押し下げていき、試合が落ち着いてきたタイミングで、ボールを保持する時間を長くしていき、自陣からボールをつなぎながら相手を動かし、ほころびを探していくことを基本としていたチームが多かったが、相手の守備の仕方を見て、攻撃の狙いを変化させることができるチームは少なかった。守備では、前線から連動して、相手に圧力をかけていき、そこで奪えないときは自陣まで引き、守備ブロックを形成し、相手の攻撃の自由を奪っていた。相手をしっかりと研究し、対策を講じた上で、相手のストロングポイントを消すために選手やシステムを変化させることがみられた。どのチームも止めて、蹴る、運ぶなどの個人の能力は数年前に比べると確実に上がってきていると感じた。準決勝でPK戦までもつれ込み、惜しくも敗退してしまった県1部リーグを戦う専修大松戸は、持ち前の個人の技術に加え、相手の強度の高いプレスに屈することなく、プレーすることができ、リーグのカテゴリーに差があっても粘り強く戦えることを証明した。今大会唯一の県立高校としてベスト4入りした白井は、高校総体県予選では決勝トーナメント前に姿を消してから、今大会へ向けて見事にチームを強化してみせた。チーム全体での守備意識が高く、ヘディングの競り合いやボールへの集結、球際でのバトルなど基本的な部分が徹底されていた点の特徴であった。これらのチーム以外も個人・チームのレベルアップをして来年度はこの2校の牙城を崩し、千葉県の高校サッカーがレベルアップしていくことを期待する。

最後にこの大会は会場や審判、役員など多くの方々の協力によって無事に終わることが出来た。大会運営に携わっていただいた全ての方に感謝の意を表すとともに、流通経済大学付属柏の全国での活躍を期待し、総評とさせていただく。

千葉県立市原八幡高等学校  
唐澤 貴人